

ゴト千七

MANGA REVIEW

「あなたはヒロシマを

知っているか?」「こうの史代

『夕凧の街 桜の国』

## 「あなたはヒロシマを知っているか？」

---

この史代さんのマンガとは、衝撃的な出会いをした。

雑誌『わしズム』vol.19の短編「古い女」を読んだのである。自分を古い女と思っている主人公の女性が、チラシの裏にマンガを描くことに生きがいを感じている、物語はただそれだけのマンガだ。

しかし、ただそれだけのマンガではないところがある。

「古い女」は本物のチラシの裏に描かれているマンガなのだ。そのために読後、一種異様な感覚に捕らわれる。「古い女」が私小説的内容に見えるので、実際にこの史代さんの人生を写生したモノであるかのような、錯覚に陥るのだ。実際には、どうも事実とは違うらしいフィクションであるのだが、事実と思い込ませるモノが、このマンガにはある。『ブレア・ウィッチ・プロジェクト』などの擬似ドキュメンタリー的、といえればいいか。

そうして、私の中にこの史代さんは記憶されることになった。

平成21年11月の末頃に私は講義を受けに、放送大学の本部がある千葉へ行き、その際に付属図書館にも立ち寄った。そこで、『夕凧の町 桜の国』を見つけた。棚には他にも、中国語版、韓国語版らしきバージョンも見うけられる。原典を手に取り表紙を捲ると「著者寄贈」とある。

この史代さんは、放送大学の受講生だった。教養学部を卒業している。

おそらく、その縁でこの付属図書館に著作を寄贈したのだろう。

私は『夕凧の町 桜の国』を手に取り、借りてセミナーハウス(学生が利用できる宿泊施設)で読んだ。

手塚治虫文化賞の新生賞を受賞した『夕凧の町 桜の国』は、広島(ヒロシマ)に生きる、あるいは生きた、ある一家三世代の物語だ。

私が注目するのは、「手」のクローズアップである。

結論から先に言えば、この史代さんにとって「手」というのは、非常に重要なファクターだ。映画監督のクリント・イーストウッドでいえば、「脚」にあたる(『アウトサイダー』や『ミリオンダラー・ベイビー』を思い浮かべてほしい)。印象深いシーンには、「手」が出てくる。

「桜の国Ⅰ」では、七波(映画版では田中麗奈)が弟の入院先まで"サクラの出前"に行き、サクラの花びらを手の平から放つ。もちろん、このシーンは七波の「手」がクローズアップされる(「桜の国Ⅱ」でも紙ふぶきを放つとき、同じ構図を企まれている)。

また、七波が自宅玄関の鍵を開ける構図には、「手」がコマに入るように配置されている。この39頁(「桜の国Ⅰ」内)で七波が思うことが、40頁後(「桜の国Ⅱ」内)に判明する。「手にした鍵が記憶の扉を開く」かのような、演出効果を生み出している。そして、扉の奥の記憶には、やはり、「手」がある。それは、吐血によって血塗られた母の手だ。そして、娘の帰宅に、いつも通りに「おかえり ななみ」と平静を装おうとする母の姿が痛々しい。

これらクローズアップの多用は、「手」を描くことに自信がなければできない。さらに、「手」を描かないことにも、気が配られている。

「夕凧の街」で、凧生(映画版では麻生久美子が演じた)が寝込んでいるとき、凧生の内話として

「だまって手を握る人がいた  
知っている 手だった」

というセリフが語られている。

凧生の手を握ったこの人物は、いったい誰なのだろう？ 凧生の周囲の人々は、すでに見舞いに訪れている。「知っている 手だった」とあるからには、親しい間柄で、そして過去形である。この点を踏まえた上で、考えられるのは、みどりちゃんだ。(凧生の母であり七波の祖母の可能性もあるが、それでは実に「ありきたり」である)

「桜の国Ⅱ」にて墓に名が刻まれているみどりちゃんは、作中では登場しない。爆後の混乱で行方不明となっている。しかし、物語を通じて、存在している。「夕凧の街」にて凧生が「おとみさん」を歌いながら帰宅していると、子供が「みどりちゃん」と友達の名を呼ぶ。みどりちゃんは、凧生の妹だ。妹と同じ名の子がいることの偶然に驚き、同時に失った妹のことを思い、「おとみさん」の歌詞にある言葉を口ずさむ。(このシーン、映画版では、カットされている。残念である)

さらに、「桜の国Ⅱ」では、おばあちゃんがねぼけて、七波のことを「みどりの友達」と思い込んで「みどりに会いに来た」のだと思って対応する。そして、七波に「みどりは出掛けている」と告げる。そうだったのだ。娘が「まだ帰ってきていない」という思いで生きていたのだ。おばあちゃんは。

七波の二人の伯母、凧生とみどりは原爆によって、とられた(このことが東子につらい思いをさせるのである)。「だまって 手を」握った人物は、先に行っているみどりちゃんではないか。それなら、凧生を迎えに来たのだと、解釈できる。

このことから、みどりちゃん(呉を舞台とした『この世界の片隅に』で言えば、主人公の姪にあたる)は『夕凧の街 桜の国』という物語において、未登場でありながら、大きな役割を担っている。あれだけ、「手」がクローズアップされているのに、彼女の手だけは見せてはいないことを考慮すると、映画『第三の男』の「あえて見せない」ことで想像させている、演出ではないかとも思える。

物語の終盤においても、「手」がクローズアップされ、七波の手から紙ふぶきが舞うとき、その紙ふぶきは桜の花びらとなって、七波の両親の物語に移る。彼らを"見守る"七波の独白は、静かな感動を誘う。

読後、我々読者はこの史代さんから、ヒロシマを手渡しされていることに気づく。そのとき、我々はヒロシマを知るのである。そして、「夕凧の街」の空白部分が埋まり、物語が完成する。

『夕凧の街 桜の国』をまだ読んでいない人に、私はこう訊ねるだろう。

「あなたはヒロシマを知っているか？」

《終》

マンガレビュー 「あなたはヒロシマを知っているか？」 『夕凧の街 桜の国』 こうの史代

<http://p.booklog.jp/book/21827>

著者：ゴトチヒ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/gotochihi1980/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21827>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21827>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

ANIMATION  
REVIEW

アニメレビュー

『魔法少女まどか☆マギカ』

『魔法少女まどか☆マギカ』  
シャフト

あの誤配されて溜まった、  
山積みのデッドレターが、  
焔をあげて魔力に変わる。  
「少女と世界と趣向と魔法」より

ブックログのpapier ¥10

Architecture Product System 広告

『タラの街 謎の国』

映し出したるお宝の謎の国  
『お宝の国』

MANGA REVIEW

コミック